

沖縄本島南部及び 周辺離島の文化財

本島南部及び 周辺離島





凡例

	世界遺産
●	国指定史跡
▲	国指定名勝
●	県指定史跡
▲	県指定名勝
●	登録記念物
★	特別名勝

道路凡例

	国道		県道主要地方道		県道一般道		高速道路		モノレール		市町村境界線
--	----	--	---------	--	-------	--	------	--	-------	--	--------



玉陵は首里城の西にある、第二尚氏王朝の陵墓（お墓）です。1501（弘治14）年尚真王が尚円王の遺骨を、「改葬」するために造営しました。

自然の岩山を加工して造られ、3つに分かれた墓室は、中央に洗骨前の遺体を入れる中室、その左すなわち東側の墓室には洗骨後の王および王妃、西側の墓室にはそれ以外の家族の遺骨を納めました。

玉陵も沖縄戦で大きな被害を受けましたが、1962（昭和37）年から1977（昭和52）年にかけてほぼすべて

の修復を完了しました。修復には戦前の写真を参考に、残された部分を最大限に利用するなど配慮されています。1934（昭和9）年、尚典侯の夫人を葬り、石の扉をしたのが最後であるといわれています。

玉陵は、16世紀の琉球地方で確立された、独自の石造記念建造物のデザインを示す貴重なものとして、2000（平成12）年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。



第一門前の道と東の御醫所



戦前の写真や証書によって復元された東の御醫所



DATA

所在地：那覇市首里金城町1丁目

開園時間：9時～18時

定休日：年中無休

利用料金：大人 300円 小人(中学生以下) 150円
※20名以上で団体制引適用

(2018年3月現在)



首里城正殿

世界遺産に登録されている中でも、最もその存在感が大きいのが首里城跡です。首里城がいつ頃建てられたのかははっきりしませんが、尚巴志が琉球を統一した1429(宣徳4)年頃には、すでに歴史の表舞台に登場しています。その後、450年近くも王国の政治・外交・文化の中心でした。

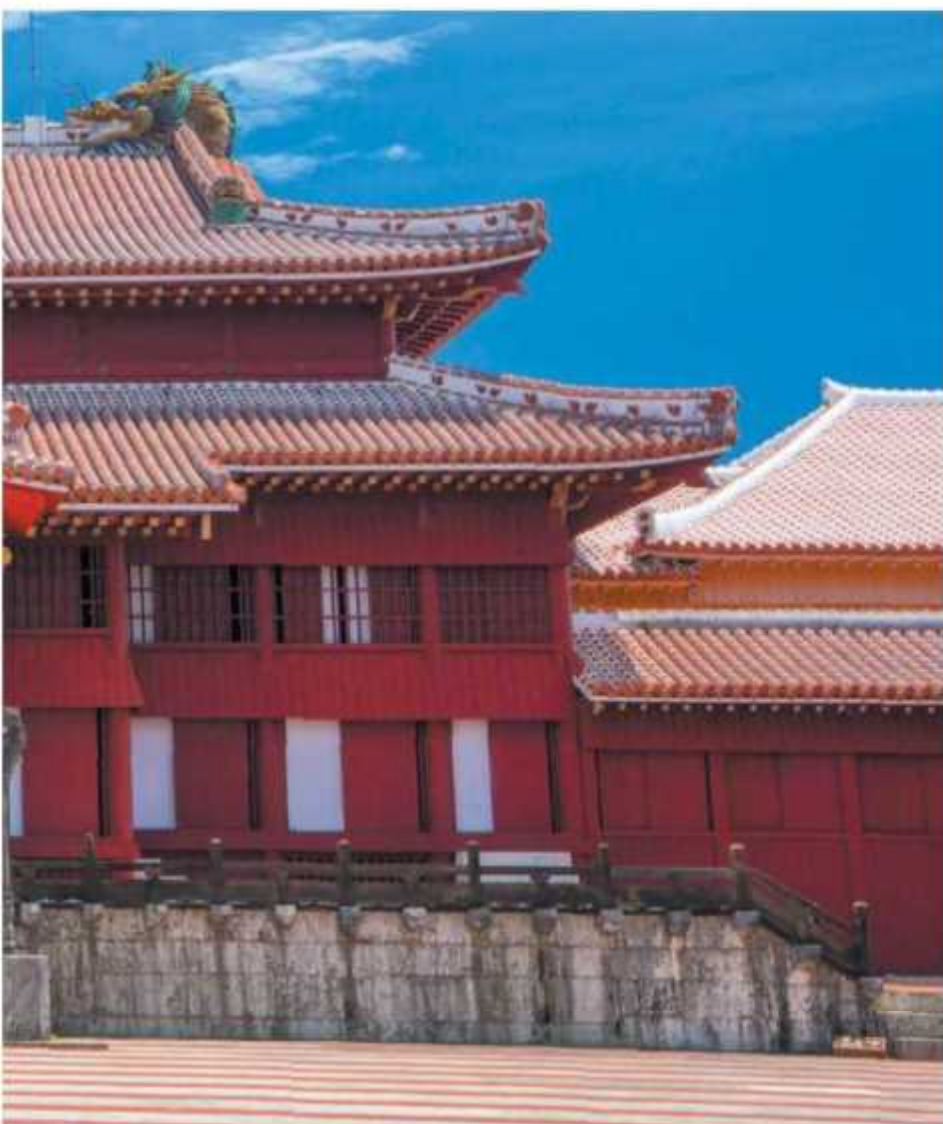
第一門として中山門、第二門として守礼門を構え、さらに守礼門左側の園比屋武御嶽石門を経て、城門第一門としての歓会門を設けています。首里城は、*内郭と*外郭からなり、城の外郭としてはこの歓会門を正門とし、久慶門、継世門の三門があります。内郭には瑞泉門、美福門、淑順門、白銀門などを設け、これらの門をつなぐ石垣は琉球石灰岩の切石をもって高く厚く積み上げ、櫓はどれもこの石垣の上に乗せられています。

城内の施設には正殿を中心にその前に御庭と呼ばれる広場があり、左右には南殿と北殿が向き合うように建てら

れています。首里城正殿は琉球最大の木造建造物であり、日本と中国の建築様式を見事に取り入れた当時の人々の知恵と沖縄文化の独自性を最もよく現わしています。

しかし、沖縄戦により首里城正殿は消失してしまいます。その後、1989(平成1)～1992(平成4)年にかけて、国と県の連携のもと、発掘調査や戦前の国宝指定時の実測図、古写真などに基づいて、首里城正殿の復元、再建が行われました。この時の調査によって、正殿の地下にある*遺構がきわめて良好に残っていることや、これまで四度にわたって*基壇の拡張や改修が行われたこと、そしてその度に地下遺構を大切に保存した上で再建してきたことが明らかになりました。

このような調査結果を受けて、遺跡の重要性が認められたことから、2000(平成12)年12月に園比屋武御嶽石門を含めて、世界遺産に登録されました。



園比屋武御室石門



歓会門



久慶門



健世門

(首里城正殿及び守礼門の写真:一般財団法人沖縄美ら島財団 首里城公園管理部提供)



守礼門



DATA

所在地：那覇市首里当殿町3丁目

開園時間：●無料区域（歓会門、木曳門、久慶門）
 4月～6月、10月～11月：8時～19時30分
 7月～9月：8時～20時30分
 12月～3月：8時～18時30分

●有料区域（正殿、奉神門、南殿、番所、書院・鎖之間、黄金御殿、寄溝、近習詰所、奥書院、北殿）
 4月～6月、10月～11月：8時30分～19時（入館券販売締切：18時30分）
 7月～9月：8時30分～20時（入館券販売締切：19時30分）
 12月～3月：8時30分～18時（入館券販売締切：17時30分）

定休日：7月の第1水曜日とその翌日

利用料金：大人 820円 高校生 620円 小・中学生 310円 6歳未満 無料
 ※20名以上で団体割引適用 ※年間パスポート制度あり

撮影地：首里城公園

(2018年3月現在)

円覚寺跡

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



円覚寺は尚真王の時代、1492(弘治5)年より3年の歳月をかけて創建された仏教寺院で、京都の南禅寺の僧、芥隠を招いて寺を開きました。仏教の寺院につける呼び名である山号を「天徳山」といいます。円覚寺は沖縄一の規模を誇り、琉球国における臨済宗の総本山であり、第二尚氏の位牌を祀るお寺、菩提寺でもありました。

*伽藍は西に位置し、高さ約2mの石垣で周囲を囲い、中央に総門、その左右に脇門を設けていました。総

門を入ると、放生池があり、そこにかかる石橋、放生橋を渡ると幅広い石段が設けられており、そこを登りつめると三門にいたるようになっていました。三門を入ると、仏殿・龍淵殿・*鐘楼・庫理などの建物が配置され、鎌倉の円覚寺を参考にした荘厳なものでした。

円覚寺は去る沖縄戦で大きな被害を受けましたが、1968(昭和43)年に総門が復元されました。現在、三門の復元に向けて準備が進められています。



DATA

所在地：那覇市首里当蔵町1丁目、2丁目

注意事項：総門より内側は一般公開されていないため、立ち入ることはできません。



放生池と放生橋



天女橋と先府天宮

すえ よし くう あと

国指定史跡

末吉宮跡

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月15日



末吉宮跡は首里城の北方、現在の末吉公園の中に位置しています。別名「社壇」とも称されます。第一尚氏第六代尚泰しやうたいの久王きゆうわうの頃に、天界寺の住職であった鶴翁和尚かくおうが御神体ごしんたいの熊野くまの権現ごんげんを勧請かんじようしたのが始まりだといわれています。

琉球国時代から人々の信仰があつく、国王も毎年正月・5月・9月に参詣さんぎしていました。官社かんしゃであった琉球八社りゅうきゅうはっしやの一つとして、神仏混合しんぶつこんごう、本地垂迹ほんじすいじやくの信仰のあり方の伝来を示しています。

現在の建物は戦後に復元されたものですが、戦前の1936(昭



DATA

所在地：那覇市首里末吉町1丁目

和11)年には末吉宮本殿として国宝指定を受けた建造物でした。復元された姿から建物の造りを見てみると、中心となる本殿は円柱状の柱ですが、建物の前面に突き出して庇ひだしのような形状こうばいの向拜まがひには四角い柱です。屋根は沖縄伝統の赤瓦あかかわら葺きで「三間社流れ造り」という、屋根の勾配こうばい(傾き)の片側が三間さんげんかん(約5.4m)長い独特の形状をしています。

また、本殿の前方には小さい谷があることからアーチ型の石橋いしはしが架けられており、その上に復元された拜殿はいでんが設けられています。拜殿は切石を積み上げた礎道そとぢ(石段の坂道)と連結しています。

末吉宮跡は、末吉の鬱蒼うっそうとした森とともに、社やしろとしての景観を保全しており、現在でも琉球八社りゅうきゅうはっしやとしての趣おもむきを伝えています。

このように沖縄の神社建築創始期の形式や手法を知る上で重要な場所として、1972(昭和47)年に国の史跡に指定されました。



識名園は、第二尚氏第15代目の国王尚温王時代の1799（嘉慶4）年に造営された王家の別邸です。王家の保養や冊封使（中国の皇帝の使者）の接待などに利用され、外交的な役割を果たしていました。また、首里崎山にある御茶屋御殿を東苑というのに対し、首里の南に位置していることから南苑とも呼ばれていました。1800（嘉慶5）年には尚温王*冊封のため訪れた正使趙文措、副使李鼎元を招いています。

池の周りは、歩きながら景色の移り変わりを楽しむ*回遊式庭園になっています。日本風の築山(P154)や「心」の字の形を表現した池に大小二つの中島を築き、そこには中国風のアーチ型の石橋が架かり、小島の方には六角堂が建っています。庭園の設計には、17～18世紀の日本庭園や中国の影響もありますが、全体的な構成は琉球独自のものとなっています。

1945（昭和20）年の沖縄戦で大きな被害を受けましたが、その後修復工事が行われ、現在でも屋根の修復などを行いながら当時の姿を今に伝えています。

池の北側には水源になっている育徳泉があり、園の南西側に勸耕台と呼ばれる見晴らしの良い場所があります。

識名園は日本庭園文化において、琉球で確立された独自の庭園デザインを示す貴重な事例として、2000（平成12）年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。





観耕台



中国風のアーチ橋



富嶺泉



穴宮堂

DATA

所在地：那覇市字真地御殿原

開園時間：4月1日～9月30日 9時～18時（入場締め切り17時30分）
10月1日～3月31日 9時～17時30（入場締め切り17時）

定休日：水曜日
（その日が休日又は「慰霊の日」（6月23日）のときは、その翌日）

利用料金：大人 400円 小人（中学生以下）200円

※団体扱いは20名以上

※保護者が同伴する未就学児は無料

※那覇市に住所のある65歳以上の方が観覧する場合は半額

※身体障害者手帳、療育手帳又は精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方は無料（手帳の提示が必要。介護者は1名まで無料。）

（2018年3月現在）



銘苅墓跡群

●指定年月日／2007(平成19)年7月26日



発掘当時の様子 写真：那覇市文化財課提供

銘苅墓跡群は*グスク時代から近世、近代の遺跡です。遺跡は那覇市の銘苅小学校の南西側にあり、周辺は琉球石灰岩が分布し、緩やかな起伏の中を北西方向へ流れる小川沿いの谷にあります。

戦後、米軍住宅施設の敷地内にありましたが、1987(昭和62)年に全域が返還され、伊是名殿内の墓と都市公園予定地内にあった一部の古墓が保存されました。

那覇市教育委員会によって1990(平成2)年から2003

(平成15)年まで発掘調査が行われており、多様な形式の墓が330基以上確認され、その成立が14・15世紀であることが明らかになりました。そのうち成立が最も古く、沖縄地方の墓制の成立と展開を考える上で最も重要な銘苅川北岸の29基の保存が図られました。保存地区には崖面の岩陰の前に石を積んで墓室とした^{かこいにみいわけ}罅込岩陰墓2基、琉球石灰岩の下にある粘土層に横穴を掘り込んで墓室とした掘込墓26基、*亀甲墓1基があります。



DATA

所在地：那覇市銘苅2丁目



発掘当時の伊是名殿内の墓 写真：那覇市文化財課提供

い え どん ち てい えん

国指定名勝

伊江殿内庭園

●指定年月日 / 1986(昭和61)年6月16日

国
名
勝

伊江殿内庭園は、那覇市立首里図書館の斜め向かいの路地を、北へ約 20 m 入った場所に位置する伊江家（伊江殿内）の庭園です。

作庭した年代について、時期を明確に示す資料はありませんが、1800（嘉慶5）年に来琉した冊封副使の李鼎元が記した『使琉球記』には、すでに庭の景観が整っている記述があることから、庭は少なくとも 1800 年以前に完成したと考えられています。



DATA

所在地：那覇市首里当惑町2丁目

注意事項：整備途中のため、一般公開されていません。

琉球石灰岩を利用して造られた庭園で、段々に造られた豊かな曲線を描く大小8つの池があり、樋から吐かせた水を鑑賞させる機能を持つ龍頭や水路、水槽があります。さらに、築山（P154）の西側の岩盤には「常」や築山の東側では麓の岩盤の「喜」、中腹の岩盤の「漱石山房」、頂部の岩盤の「樂雲」などの文字を漆喰によって陽刻（文字が浮き出るような彫刻）が施されています。これらは、日本庭園の造り方とは異なり、さらに琉球庭園の中でも稀な事例です。

また、琉球国時代の身分の高い人達がどのような庭を好んだかを知る上でも、重要で価値の高い庭園です。



(全写真：那覇市文化財課提供)

国指定名勝

伊江御殿別邸庭園

●指定年月日／2009(平成21)年2月12日

国
名
勝



伊江御殿別邸庭園は、史跡首里城跡の北東約 1.3km、
標高 126.8 m の小高い琉球石灰岩の丘陵上に位置してい
ます。琉球国時代の最高の位階名である王子を名乗る家
の中でも、特に格式の高い伊江家（伊江御殿）の別邸に
ある庭園です。現在、別邸の一部である東西約 150 m、
南北約 70 m の細長い敷地が残っています。

主庭園への導入路は園池（庭と池）に架かる石橋を経て
主殿の前庭へ連続しています。園池は複雑な石組みの汀

線（岸）を持ち、入り組んだ奥部には洞窟風の折り重なっ
た石組みがあり、独特の意匠や構造などが見られます。

また、伊江御殿別邸庭園には「鶴」の文字を漆喰で陽
刻（文字が浮き出るような彫刻）を施した景石（趣を整え
るための石）が存在したとされ、他の琉球庭園に共通す
る特質として注目されています。

伊江御殿別邸庭園は旧態をよく残し、その意匠や構造、
技法には琉球庭園の独特の伝統様式が見られ、琉球国時
代の上流階級の庭園として、高い芸術的な価値を有して
います。



DATA

所在地：那覇市首里石嶺町1丁目

注意事項：一般公開されていません。



国指定名勝

しゅ り じょう しょ いん さす の ま てい えん

首里城書院・鎖之間庭園

●指定年月日 / 2009年(平成21)年7月23日



国名勝

首里城書院・鎖之間庭園は、首里城内にある、首里城正殿と同様に復元された庭園です。書院（国王の日常の執務所）及び鎖之間（王子の控え所）の南側の首里城内郭の南辺をめぐる城壁に面して、琉球石灰岩の岩盤や地形を存分に活かした独特の趣を持っています。

書院・鎖之間では正殿などの公式の儀礼とは異なり、国王や王子が親しく相手と接するために茶が振る舞われ、個人的な関わりを重んじる接待が行われていました。庭園はこのような奥向きの場を彩る空間として準備されるとともに、中国から来訪した冊封使などの客人に対するおもてな

しのための場所としても重要な意味を持っています。

発掘調査の結果、一部に切り削られた痕跡が認められましたが、岩盤の保存状況は良好で、築山（P154）へ登る石段、ソテツやマツを植えた岩盤上の凹み、築山の裾の部分に撒かれたサンゴの破片など、庭園の芸術上や観賞上の価値の骨格を成す地形及び独特の意匠を示す痕跡が良好に残されていることが判明しました。



DATA

所在地：那覇市首里当感町3丁目

注意事項：庭に降りることはできません。

撮影地：国営沖縄記念公園（首里城公園：首里城書院・鎖之間庭園）

※詳細は73ページを参照

(2018年3月現在)



龍潭及びその周辺

●指定年月日／1955(昭和30)年11月29日



龍潭は、尚巴志が中国からの使者である冊封使一行をもてなすために、王府外交の重要な役職を担った懐機に命じて造らせた池です。俗に魚小堀とも言われ、池には多くの魚が群れ泳いでいたといわれています。1427(宜徳2)年に建てられた石碑「安国山樹花木記碑」によれば、各国の美しい花木が周辺に植えられ、水中には魚が泳ぎまわり池の周りにあった高樓(高い建物)の姿が水面にくっきりと映る、琉球随一の名勝地であったと記されています。

首里城内にある龍樋の清水が、円鑑池に流れて、さらに龍淵橋の下をくぐりぬけて龍潭に注ぐようになっています。池の水の量は、世持橋の水門で調節されるようになっており、池では、冊封使一行を歓迎するための龍舟宴が催されたといわれています。



DATA

所在地：那覇市首里真和志町1丁目

撮影地：首里城公園



そのひゃんうたき

県指定史跡

園比屋武御嶽

●指定年月日 / 1955(昭和30)年11月29日



守礼門裏手の左側にあたる石門とその後ろの木が生い茂っている一帯の森を園比屋武御嶽と言います。この御嶽は国王が外出するとき、行き帰りの安泰を祈願したと伝えられる拜所です。また神女の最高位にある*聞得大君の就任式「御新降り」の儀式の際にもこの御嶽に参詣したといわれ、王府行事や祭祀と密着した重要な御嶽でした。「ソノヒャン」の名称については、第二尚氏の祖尚円王の生誕地である、伊是名村勢理客の田の神御嶽

のソノヒャン神を勧請して祀ったのがその由来だといわれており、今でも信仰の対象になっています。

石門の建造年については、門の扁額に「首里の王おきやかもいかなし（尚真王の神号）の御代にたて申候、正徳十四年己卯十月二十八日」とあり1519（正徳14）年の尚真王の時代、竹富島生まれの西塘によって造られました。この御嶽の石門は国の重要文化財（建造物）指定を受け、世界遺産にも登録されています。



園比屋武御嶽石門正面



戦前から残る屋根の一部

DATA

所在地：那覇市首里真和志町1丁目

撮影地：首里城公園

県指定史跡

県指定名勝

首里金城町石畳道

●指定年月日／1964(昭和39)年5月1日



首里金城町の石畳が完成したのは、1522（嘉靖1）年の尚真王の時代であるといわれており、琉球国時代に造られた石畳道の中で最も代表的なものとなっています。造られた後も修理・改修が繰り返されたようですが、その詳細は明らかにされていません。

この道は、南部へ通ずる重要道路（真玉道）の一部であり首里から南部へ向かう重要な道でした。島添坂の下方にある金城大通りから金城橋へ下るおよそ300mにわたる石畳道で、敷石は20～30cm程の琉球石灰岩を組み合わせた「乱れ敷き」という手法が用いられています。1945（昭和20）年の沖縄戦では、砲弾の死角になっていたため破壊を免れ、現在でも生活道路として親しまれています。

石畳道の周辺には、首里金城の大アカギ（国指定天然記念物）や、金城大樋川（那覇市指定史跡）などの文化財も残され、道の両側にある屋敷囲いの石垣が石畳道と調和し、今でも城下町の風情を残しています。





DATA

所在地：那覇市首里金城町

崎樋川貝塚

●指定年月日／1956(昭和31)年10月19日



崎樋川貝塚は、那覇市天久にある縄文時代前期と弥生時代の複合遺跡です。

遺跡は東シナ海に沿ってほぼ南北方向に延びる琉球石灰岩の西側縁辺部の崖下の原野に立地する縄文時代前期の貝塚Aと、その西側に広がる臨海砂丘の背後に立地する弥生時代の貝塚Bで、時期が異なる遺跡で構成されています。貝塚Aは1932(昭和7)年に発見され、同年京都大学の島田貞彦によって発掘調査が行われています。貝塚Bは以



DATA

所在地：那覇市宇天久

前から知られていましたが、1965(昭和40)年に確認され、同年に試掘調査が行われています。

貝塚Aでは厚さ約120cmの貝層が確認され、土器は伊波式土器(P42)と荻堂式土器(P58)が主体で、石器は*石斧や石槌など、*貝製品は貝輪や貝匙、貝刀など、*骨製品は骨錐や肋骨製の鋸状刀子が出土しています。その中でも注目されるものとして蝶形骨器があります。自然遺物では小型犬の骨が数体分見つかリ、「崎樋川犬」と呼ばれています。

貝塚Bでは無文でくびれ平底や尖底の土器、貝輪や貝錘、貝皿などの貝製品が出土しています。



蝶形骨器
(写真：京都大学総合博物館
(英名：The Kyoto University Museum)提供)

県指定史跡

べん が だけ

弁ヶ嶽

●指定年月日 / 1956(昭和31)年12月16日



弁ヶ嶽は、首里城の東方約1km離れた首里鳥堀町にあって、ビンヌウタキとも呼ばれています。標高約160mの小丘を中心とし、戦前は、松をはじめ大木がそびえた神聖な場所です。大小二つの嶽からなり、大嶽は、神名「玉ノミウチ、ステカワノ御イベツカサ」といい、久高島へ向かって拝む場所となっており、小嶽は、神名「天子」といい、南城市の斎場御嶽(92・93)へ向かって拝む場所といわれています。ここでは、毎年1月、5月、9月に国

王による祭祀が行われていたといわれています。

御嶽の石門は、1519(正徳14)年に竹富島生まれの西塘が造ったといわれています。園比屋武御嶽の石門と同じ型で、戦前は国宝に指定されていましたが、沖縄戦で壊されてしまい、現在はコンクリート造りの門が建てられています。琉球舞踊の二才踊り(男踊)の下り口説に「あれあれ拝めお城元、弁のお嶽も打続く」と謡われているように、昔から航海の目標にもなっていました。



DATA

所在地: 那覇市首里鳥堀町4丁目



仲島大石

●指定年月日／1958(昭和33)年3月14日



仲島大石は、那覇市泉崎の旧市外線バスターミナル構内にあります。高さ約6mで中央部の周囲約20m、下部の周囲が約18mもある琉球石灰岩の巨岩です。

14世紀末に中国から帰化した久米村の人たちが大切に
した守り石で、この石を竜の珠になぞらえていました。昔、
久米村の人たちはこの岩を文筆峰ぶんぴつほうと呼び、縁起の良い所
として大事にしたといわれています。

岩の下部がえぐられているのは波によるものであり、昔

はこの辺が海であったことを示しています。この一帯には、
かつて「仲島のこぼし小砦」・「仲島のこぼり小堀」・「仲島蕉園跡」な
どがありました。

また、遊廓ゆうかくもあったために多くの人たちが行き来してに
ぎわったといわれています。その頃は、多くの詩歌にこの
一帯が謡われ、歌枕的存在のところでした。



DATA

所在地：那覇市泉崎

県指定史跡

那覇市山下町第一洞穴

●指定年月日 / 1969(昭和44)年8月26日



山下町第一洞穴は、国場川流域の東西方向に走る琉球石灰岩丘の北斜面中腹（標高約 15 m）に立地する、旧石器時代の遺跡です。間口約 1.2 m、奥行約 5.5 m、高さ約 3.2 m の半洞穴で、間口はほぼ西方向を向いています。

1962（昭和 37）年に*琉球政府文化財保護委員会、1966（昭和 41）年には沖縄洪積世人類遺跡調査団の発掘調査の結果から、洞穴には6層からなる約 3.5 m の堆積土が確認されています。その中の第5層の上部から6～

7才くらいの女児のものと思われる大腿骨が発見され、山下洞人^{やましたどうじん}と命名されています。また、第3層から採集した木炭の放射性炭素年代測定により、今から3万 1,100～3万 3,100 年前の沖縄最古の遺跡であることが分かっています。第5層で石弾状遺物が2点、第6層で鹿の角が出土しています。なお、第5層出土の礫器状遺物は自然の石を使用したものと判断しています。

更新世の化石人骨と考えられる資料は、我が国のみならず東アジアの旧石器時代を知る上で貴重な資料です。これらが発掘された場所であることから、史跡として指定されました。



DATA

所在地：那覇市山下町